

四楓院家の白い姫

のうち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜一に転生者の姉がいたら

目

次

第1話

始解の時、動き出す運命

旅禍侵入

もう一つの形

朝陽の辯解

17 14 10 4 1

第1話

戸魂界の五大貴族の1つ、四楓院家の当主に就任した四楓院夜一には自分と腹違いの姉がいる。

そのものの名は四楓院朝陽という、彼女は夜一の前の四楓院の当主である夜一の父が使用人との一夜の間違いにより誕生した子である。

そう、そのものは四楓院の名を与えられているもののその肌は四楓院の褐色の肌とは似ても似つかない白い肌をしている。

「夜一、またここに来ていたのね。あまりここに近づいてはいけないとお父様から言われているでしよう。」

「なんじや、姉上そんな堅苦しいことを申すな。それより今日もまた姉上の笛の音を聞かせてくれんか。」

「もう、しようがないわね。一曲だけよ。」と朝陽は自分の得意分野である楽器の中から笛を取り出し、音を奏でる。

夜一は腹違いであれど、大好きな姉の奏でる美しい笛の音に耳を傾けるのだった。

私、四楓院朝陽はいわゆる転生者という奴なんだろう。私は四楓院家の中では嫌わ

れものの立場にある。

私は妾の子、つまりは愛人との子だ。それも貴族ではなく使用人との間に生まれた子である。今世での私の父はとても優しい人であり、そんな私でも愛をくれた。

私のやりたいことはなんでもやらせてくれた。

前世は音楽をやっていた私は特に楽器の稽古が楽しく、その中でも笛が一番の得意な楽器である。前世のように西洋じみたギター やウクレレ、エレキギター やベースなどはある訳ではなく、伝統的な日本の楽器であるが私はどれもやつて見れば面白く、隠密機動の稽古なんかよりよっぽど楽しかったのを覚えている。

そんなこんなで私も靈術院を卒業して私は二番隊の第三席として働く事になる。隠密機動の中でも結構な位置にいて、コードネームみたいなものもあって、私は響鬼と言われている。その名前なのも私は隠密機動の刑軍の特別部隊。その名も鬼部隊にいるからである。

そして私は山じいのやつてる学院の一期生、京楽や浮竹と同期である。

「やっぱり音楽つて最高だね。」と私は一人、音を奏でていると

「やあ、いつ聞いても見事なもんだね。」

「春水、またサボり？」

「そういう君だつてそうじやないか。」

「全く学院なんて殆どがうちで習つたことだから退屈なんだ。だからこうして音を出してた方が退屈しなくて済むつてものさ。」

「そう、それじゃ。サボリが見つかるまでの間、聞いてもらおうかな。」と私は今日持つてきていた楽器、三味線でメロディを奏でる。

そしてそれから数分後、

「いやあ、お見事お見事、いつ聞いても、朝陽の楽器は見事なもんだね。」

「ありがとう。ところで山爺、後ろにいるけど」

「え・・・」

「ふ、こんなところでサボりおつてからに覺悟せいよ。」

とこの後、私と春水はこの後たっぷり山爺に怒られました。

始解の時、動き出す運命

四楓院朝陽は現在、自分の斬魄刀との対話を行つていた。

「……………」

と広い世界に所狭しと楽器が並び、そこら中に飾られている。

「ここは、貴女の精神世界、そして私達、斬魄刀の住う場所」

その声とともに大きなフルートのような槍を持った鬼の女性が現る。

「貴女が私の斬魄刀？」

「そう、私は貴女の斬魄刀、名前は響鬼。貴女の隠密機動の時の偽名と一緒にね。よろしく」

「うん、よろしく響鬼」

「ええ、よろしくお願ひします。朝陽」

「私の能力は攻撃の当たつた相手にこの槍笛の音色を聞かせてダメージを与える物です。その際に、その音の振動で敵を内側からズタズタにしたり、操ることも可能です。」

「ふーん、ずいぶんシンプルだね。」

「まあ、貴女の精神が反映された結果ですし、別に悪くないでしょ」

「まあね。」

と私は精神世界から目が覚めると斬魄刀の柄と鍔の形が変わっていた。

私は、学院の演習場で斬魄刀を試してみる事にした。

斬魄刀を鞘から抜き、笛のような持ち方をして解号を唱える。

「鳴らせ！、響鬼！」

そうすると斬魄刀が精神世界で見た槍へと変わる。

「おお！」

なんて、昔の夢を今日は見てしまった。

やあ、懐かしいな。あの頃の夜一はちつちやくて可愛いかったな。

まあ、今でも可愛いんだけどね。

さて、そういうえばすこし前、私は妹に席次を抜かれて夜一は二番隊の隊長へとのし上がっていた。まあ少し前とは言つてもすでに50年くらいの間なんだけどさ。

まあ、現在、私は稀ノ心さんを抜き、副隊長になつた。

現在、私は本日の仕事を全て終わって、楽器の手入れをしていると

「あれえ、朝陽さん」

「喜助、どうした？」

「夜一さんが見当たらないんスけど、何か心当たりありませんか」

ら

「そうね。夜一なら、そこの屋根裏あたりでひつそりと隠れてるんじしやないかし

と私はそう言つて、天井をこづくと本当に夜一が降りてきた。

「なんじや、やつぱりバレとつたか。」

「あまり、サボリすぎも良くないわよ。夜一」

「なんじや、姉上だつて、今さつき仕事もせんと楽器の手入れを」

「残念だけど、今日の私のするべき仕事は今のところ全部終わらせたの。だから、追加の書類が来るのを待つてゐる間に最近さわれてなかつたこの三味線の手入れをしていたのよ。別にサボつて訳じやないわ。」

「まあ、そう言う事つスよ。」

私はそもそも妾の娘であるため、当主候補から外れており、尚且つ刑軍の統括軍團長は四楓院の当主たるものとの役目である為、私には継ぐことは不可能なのである。

そういうえばこの前、新人に碎蜂が入ってきた。

いやあ、これがまた可愛いのなんのつてさあ、まあそろそろ私も

考えなくちやいけない時期かな、三番隊に鳳橋燐十郎が就任、十二番隊の曳舟隊長も出世して近々隊を離れるらしい。

私は副隊長の仕事をしながら、週に何回か、靈術院の生徒たちに音楽を教えていたり

する。まあ、中々やりがいのある仕事だよね。

「まあ、とりあえずは鍛錬あるのみだね。」

と私は鍛錬をしながら1人呟く。

それから数年、やつてきました。なんと喜助が十二番隊の隊長に就任したのです。いやあ、夜一や喜助の小さい頃を知っている私からすると2人が隊長になつた姿にとても感動したのを覚えてる。

そんなんでもない平和な日々を留魂街の謎の魂魄消失事件の話が立ち上がるようになる。

それからなんと九番隊の六車の靈圧が消え、五番隊隊長の平子、三番隊のローズ、七番隊から愛川羅武、十二番隊から猿柿ひよりが調査に赴く事になつたのだつた。

そして今、隊長格の靈圧が消えて、喜助と握菱鉄斎は四十六室に連行された。

私はその報告を聞いて夜一をふんじばつても私が助けに行こうとしたが、そこは流石に刑軍の軍団長、私の縛りをすぐに解いて逆に私を縛つて喜助を助けに行つてしまつた。

それからしばらくして私は部屋に私を探しにきた碎蜂によつて発見され、ようやく縄を解かれるのであつた。

「朝陽様、大丈夫ですか？」

「ええ、それより夜一は?」

「その事なのですが、夜一樣のことについて総隊長がお待ちです。」

「わかつたわ。今から行くわ。碎蜂悪いけど少しついてきて貰えるかしら」

「承知しました。」

と私は碎蜂を連れて一番隊の隊舎へと向かう。

目的地に着くと碎蜂を部屋の外に待たせて、中に入ると山爺とお父さまがいた。

なんとわたしには現在、夜一や喜助の脱走幫助の疑いがかけられているらしいのだ。

私は私の知る限りのことを話す。私が今にも飛んでいきそうな夜一を拘束したものの、逆に抜けられて拘束されてしまったことを、それからだな。私の立場も大きく変わった。

なんと父様、私に刑軍の軍団長になれというのだ。まあ私の鬼部隊としての活躍があつたからだろうな。言つてるのは夜一が抜けた現在、夜一に近い実力をもつ私が刑軍軍団長の地位につき更には2番隊の隊長にまだ任命されてしまった。

図らずして自分の存在が大分原作を変えてしまった。

まあ、私が隊長になる以上は大前田さん息子には残念ながら副隊長の椅子はやれない。私の副官に碎蜂を置くことにした。

そのことを碎蜂に伝えると

「私が二番隊の副隊長ですか」

「そう、私はお前の実力をかつて、貴女を推薦したの。貴女が夜一に憧れを抱いていたのもわかるわ。でもね。今は少しでも早く刑軍や夜一の抜けた穴を埋めて立て直すことが最優先事項よ。いつ帰つてくるかもわからないけど、それまでしっかり鍛錬して遙かに強くなつた姿を夜一に見せてやりましょう。」

その言葉に碎蜂は涙を流し、私に跪く。

「はい、この碎蜂その役目、しかと拝命いたしました。」

こうして私を隊長とした新生二番隊がスタートしたのだつた。

それからの100年を私は修行や仕事、休みの日は現世に出かけて、楽器を買つたりして過ごしていた。

この度、現世へと十三番隊、浮竹のところの部下のルキアちゃんが現世へと駐在任務に出るらしい。

やあ、やつと原作開始だね。

旅禍侵入

現世にて朽木ルキアの消息が途絶えてから2カ月、朽木ルキアが一般人に死神の力を譲渡したことがバレて、尚且つ極刑の判決が下された。そして朽木ルキアは朽木白哉、阿散井恋次の2人によつて尸魂界に連行されてきたらしい。

そして私は少し、朽木ルキアのことについて調査すべく、六番隊の牢に来ていた。

「やあ、君が朽木ルキアだね。」

「貴女は二番隊の四楓院隊長!、何故ここに?」

「うん、君の現世で入つていた義骸を回収したのは我々二番隊なのだが、あの義骸をつくつた人物に心当たりがあつてね。すこし話を聞いてみようと思つたのさ。」

「はあ・・・」

「あれは浦原喜助という人物がつくつたものではないかな。」

「四楓院隊長は、浦原を知つておいでなのですが?」

「ああ、彼は私の妹の幼馴染みみたいなものだ。昔からものづくりが好きでね。君の義骸はもちろん色々なものをつくつてるのさ。」

「・・・・・」

「まあ、少しでもいい。君が現世においてどんなことを経験したのか聞いておきたい。」

「わかりました。・・・・・」

ルキアは少しずつ、現世においてのことを話していく。

それから少し経ち

「・・・・・、そうか、ありがとう。君の刑が減刑されるかどうかはわからないが私も少しは上に掛け合つてみよう。」

と私は六番隊の牢を出ていくのだつた。

それから数週間後、瀬靈廷に旅禍が侵入したという警報が瀬靈廷全土に通達される。

「碎蜂！」

「はっ！」と私の呼びかけに応じて碎蜂が現れる。

「おそらく、今回のことでの臨時の隊首会が開かれる。副隊長にも招集命令が下るだろう。それまでの間、旅禍についての情報収集をお願いするわ。」

「承知しました。」と碎蜂は瞬歩でその場から離脱した。

すると丁度良く、地獄蝶が私の元に飛んでくる。

連絡事項は緊急の隊首会を行うとのことらしい。

仕方ない。私は面倒臭いのは嫌いだが、これも一応隊長の責務だしね。

なんと三番隊の市丸が旅禍を撃退してことなきを得たらしいのだが、旅禍はこれまでへこたれずに志波空鶴の花火によつて射魂膜を突き破つて侵入してきた。

私は臨時の隊首会の為二番隊の隊舎を出て一番隊の隊舎へと向かうために歩いていると

私の目の前に黒猫が降つてきた。

「…………」

「…………」

「この、この、靈圧は!?」?

「夜一!!!!」

と私は猫を抱き上げると顔をすりすりとしていた。

「もう100年ぶりね。夜一、本当に帰つてきてくれてよかつた。」

と夜一を撫でまくる。

「あ、姉上、苦しい、苦しい」といつの間にか変化が解けていた夜一が妹と同じくらいには豊満なバストが妹を窒息させる寸前になつていた。

「あらあら、ごめんなさいね。夜一」

「全く、相変わらずといつたところじゃな。姉上は
「ごめんね。久しぶりだから、それで侵入してきた旅禍は黒崎一護くん達でいいのか
しら?」

「姉上、知つておつたのか?」

「ええ、少し前に朽木ルキアの事情聴取の時に大丈夫、私以外知らないから、それと私今
から隊首会だから、そうだ夜一、また猫になれるかしら」

「ん、まあ構わんが」

夜一は再び猫になる。

「そしたら靈圧を本当に低くしてね。」

私はそう伝えると猫になつた夜一を肩に乗せる。

「普通の猫のフリをしててね。」

と私は夜一を肩に乗せて一番隊の隊舎へ向かうのだつた。

朝陽の卍解

朝陽は隊首会のあと、隊長クラスの斬魄刀の解放が許可されたことにより、その翌日、自らも調査に出かけることにした夜一は現在、朽木ルキアのもとへと到達した黒崎一護くんを助けに向かつた。

そのとき、私の元に地獄蝶が飛んでくる。

連絡は浮竹からだつた。ルキアを助けるのを助けてほしいとのことだつた。返事は返さなくていいとのことだつた。

「ふふ、浮竹も言うようになつたじやないか。」

とそこにまた地獄蝶が、何と朽木ルキアの処刑が明日へと繰り上がつたらしい。と、さてこんなことをしている場合じやない、私は双極の真下にある夜一と喜助の遊び場に向かうことにした。

そして瞬歩を使い、遊び場について中に入る。

「やべえぞ。この靈圧、四楓院隊長だ。」

「四楓院隊長、何でここに隊長クラスが！」

「落ち着け、一護、この方はわしの姉上じや。四楓院朝陽、この瀬靈廷に置いて唯一、我らの味方となつてくれていてるお人じや」

「よろしく、黒崎一護くん。夜一から君の話は聞いてるよ。そこにいる阿散井くんも今は卍解の習得を試みているらしいね。意地が悪いな夜一、卍解ならお前も使えるだろうに君も昔は私のいた場所にいたんだから」

「え、そうなのか?、夜一さん」

「あ、いやああ、すまんのすっかり斬魄刀を使つた戦いをしておらんもんじやからな。」

「そういうと思つて」と私は懐から夜一の斬魄刀を投げ渡す。

「家から持つてきた。これで大丈夫だろ。一護くんも阿散井くんも一度本物を、見たほうがコツも掴みやすいんじやないかな。」

「それを言うなら、わしのより姉上の卍解を見せたほうがいいのではないか?それにこやつは気まぐれ出しの。100年以上ほつといんだんじや、力を貸してくれるかどうか。」

「まあ、君の言うことも一理あるな。まあ、いいだろ。見せてあげよう。」

と私は解号を唱えずに始解し、その名を唱える。

「・・・・・卍解!」

私の大きなフルートみたいな槍は消えて、私の世界が広がる。そしてその世界にお

いてその中にある楽器は全て私の武器、その数は現代に新たな楽器が登場するたび増えて言く。そしてその楽器全てに能力や属性が増えていく。

「響奏乱舞！、さてこれが私の正解さ。まあこの中にある楽器の大半は私が使える武器ということになる。ではここでいくつか能力を見せようじゃないか。」

「癒しの鈴、音回道」と私は鈴を取り出してそれを鳴らす、その音の音には回道の術と同じ効果が込められている。

「衝撃の弦、斬波！」と三味線を使うと対象に斬撃が飛ぶ

「とまあ、こんな感じだ。私の正解は大分、汎用性が高いが」

「その反面、その楽器の扱いは幼き頃より音楽に触れていた姉上にしか扱える代物ではないのじゃ」

「まあ、他にもこの正解に続きはあるけど、ここまでにしよう。さて私は碎蜂を……、副隊長を待たせていることだし、もういくよ。それじや頑張つてね。」

と私はその場から瞬歩で離脱するのだつた。

もう一つの形

双極の丘においてとうとう、朽木ルキアの処刑が開始されようとしたとき、私は浮竹がこちらに向かつてくるのを感じた。

あれえ、しかもあの手に持つてるのはワタシノイエノソウビデハアリマヘンカまあ、しようがないか、そして2人は逃げてそれを山爺がおいかける。

そして私はやりあい始めた3人の元に瞬歩で向かうことに

「卍解！、響鬼狂騒乱舞 音撃！」と私の卍解で広がつたらつくられた空間を一つの形に集約する。集約する楽器によつて攻撃力や効果は変わつてくる。

今回は、ギターの形、音撃弦烈雷である。

「斬波！」と私はギターの音から斬撃を発生させて山爺にぶつける。

「朝陽！、お前もか！」

「京楽、浮竹どういう状況？」

「四楓院、すまない。」

「随分と良いところに来るじゃないか。」

「癒しの鈴！ 音回道」とギターを鈴にかえて傷を回復させる。
そして再び、ギターに変える。

「京楽、浮竹！、こっちから援護するからどんどん攻撃行つちやつて！」
と私は曲を弾き始める。

「おつと。やつぱり朝陽の音を聞くと力が湧いてくるね。」

「ああ、いくぞ！」

と2人が攻撃をする。

「やはり厄介じやな。朝陽の斬魄刀はどれお前から……ん！」

と私達4人に四番隊の虎徹勇音から天帝空欄で連絡がやつてきた。

藍染が裏切り者であることなど、今までのすべての真実が綴られていた。

「だつてさ、山爺、急いだ方がいいんじやない？」

「そのようじやな。説教は終いじや。いくぞ！」

と私達4人は、双極に向かう。

そして私は一足先について、ルキアの身体を貫こうとする藍染の手を弦で止める。

「これはこれは四楓院朝陽、随分と早い到着じゃないか」

「ふ、私の力を知ってるだろう。」と私は弦を使つた糸の結界で藍染を拘束する。

「はああ！」と私は烈雷を刺す。

「音撃斬、雷電撃震」と私は清めの音を靈圧に乗せた必殺技のひとつを放つ
だけど、やっぱり私も鏡花水月の催眠にかかるみたい。私が攻撃を与えていたのは岩だつた。

そして、藍染は虚が現れ、それにつれて行かれる。

私は響鬼を始解の状態に戻して、何体かの大虚の仮面に靈石を打ち込む。

「音撃奏！、旋風一閃！」と私は響鬼を奏でて、その音を聞いた大虚の仮面は爆散する。

だが藍染や市丸達には逃げられてしまつた。

ああ、なんだかんだ、原作を知つても概ね、世界の修正力によつて元の運命に変わつていくのね。

はあ、これから破面編か、バウントが現れるならアニメ時空になるけど、まあどうちでも私は敵が現れたのなら、叩き潰すだけだ。